

原子力・放射線部会

会報

～紡ぐ～

巻頭言 『科学技術者への期待』

公益社団法人
日本技術士会
福島県支部
支部長 長尾 晃



【はじめに】

本年 1 月 10 日に「原子力・放射線部会 北関東地区 見学と報告会」に参加した折、「原子力・放射線部会」の活動に初めて触れ、組織と活動状況を知りました。この中で福島県の復興に心を寄せた活動も聞くことができ、嬉しく思いました。恥ずかしいかな、福島県内に原子力発電所がありながら原子力の利用についてはほとんど知らずにおりました。私たち国民が一般的にイメージする原子力や放射能は、核兵器と原子力発電所と医療機器といったところではないでしょうか。J-PARC 見学によって中性子やニュートリノ等を利用して燃料電池、磁性素材、タンパク質中の構造解析や結晶構造の解析、非破壊での元素分析等が可能であることを知りました。

見学会の数日後に、部会の会報に巻頭言を書くようにとの依頼があり、知らなかったことへの反省を含め、また福島第一原子力発電所（1

F）事故以来の福島県の現状を知っていただき、引き続きの御支援をいただきたいという思いもあり、お引き受けすることにいたしました。

【福島県の状況】

福島県は、全国第 3 位の広い面積を持っており地形は東西方向に 160 km と広く、これを奥羽山脈と阿武隈山脈が浜、中、会津と地域を 3 つに分断しております。今般の 1 F 事故は浜通りのほぼ真ん中の位置・大熊町での事故です。この近隣も含め 12 市町村が被災し現在でも約 12 万人が避難している状況です。この 3 地域の状況はそれぞれ大きく異なっております。会津地方は原発から二峯を越えた遠い場所での事故であり、放射能禍とはほとんど無縁です。しかし産業の目玉である観光客の大幅な減少が現在でも回復しておりませんし、農産物の風評被害もあります。中通りは、当初線量は低いと思われておりましたが、福島や郡山・白河などの一部に線量の高いところがあり除染の対象地区になっております。更に、阿武隈山系にある飯館村や葛尾村などの線量の高い地域も出現しております。また、浜通りのいわき市や相馬市では当初の状況がつかめず、ここから中通りや会津方部に多くの人が避難しました。被災地の周辺町村では多くの人が原発関連の仕事に就いており、事故により雇用の場を失う

ことになりました。現在の福島県の状況は、地域・就業業種・経済力の違い・年齢そして家族構成等、各人ごとに違った状況にあり一律の帰還計画では対処が困難な状況にあります。現在、被災町村は、帰還に向け必死の努力を重ねております。しかし、原発が稼働しなくなった現在、地域全体の将来像を予測し、住民の帰還・移住への希望を調査し、町の将来像を可能な限り模索した上で都市計画やインフラの整備にあたるべきでしょう。

日本学術会議が昨年 9 月に発表した提言の中で「帰還か移住か」の選択肢に加えて「避難継続」を用意したことで、避難者にとって前向きな状況が生まれるものと期待しております。

【科学技術者の責任】

事故当初政府の対応は混迷を極め、被災者の多くは何を信じてよいかわかりませんでした。このような中で、いわき市の主婦たちは、自分たちの子供に食べさせるものを自分たちで確認するために、ベクレル測定器を購入しました。国は本当のことを言うと混乱を来すのではないかとの思いで、ひたすら安全のみを発信しますが、今の国民は自分たちで調査し解決に向け努力できるのです。国はもっと国民を信じ、リスクを含め本当のことを知らせるべきであると考えております。

どのような科学技術にも必ず正と負の側面が存在しており、科学技術だけでは解決できない問題も少なくありません。行政の方向は時として、思いを遂げるために言うべきことを言わずに進めてしまうことがあり、これが破綻した場合の信頼回復は極めて困難になります。

SPEEDIについては、実証されていないから生かし切れなかったというのは、そもそも公表によるリスクを恐れ、計画時点で公表の意思が薄かったからと考えます。科学技術は政権や組織を

守るためのみに使用されるとき、ベクトルは負の方向に向かうと考えます。日本社会では、感情に触れるようなものはリスクゼロでなければならぬという思いが強く、この結果責任を取りたくないという人が増えてしまうことになっているようです。

現代の科学技術の利便性の裏には多くのリスクが存在しています。このことを国民に知ってもらう必要があります。リスクがあることを説明し、そうすることでリスク最小化への努力を続けることが可能となるのです。リスクゼロに封じ込めてしまい、いつの間にか技術者までもがそう信じ込んでしまった結果が多くの事故の原因となっていると考えます。リスクを国民が理解し受容することがこの国が発展して行く上で必要であります。リスクを受け入れることの国民への説得は極めて困難ではありますが、これは、科学技術に携わる者の責務と考えます。

【復興への道：学協会、各部会との連携】

福島県の復興には、除染と廃炉の完了とその後の産業の発展が必要です。除染は、事故後のまちづくりと一体で進める必要があると考えています。現在予定されている除染費用の多くを占める農地の除染方法は、表土を 5 cm 除去し一律に廃棄物として仮置き場に保存、中間貯蔵施設に運ぶことになっています。現在、長期にわたる工程で多額の除染費用を要し、大量の表土廃棄物を運搬・保管する予定でおります。4 月 8 日に土木学会のシンポジウムがあり、真剣な討議の中で中間貯蔵施設への大量の除染土砂搬入が困難であり、この対応への検討がありました。福島県と農水省の調査結果では、「土地をはぐ必要は無い」との報告があります。天地返しや、反転耕などの方法に換えることができれば、除染費用は勿論のこと、中間貯

蔵に係る用地の縮小、運搬の最小化、工程の短縮が図れるのではないかと考えます。これらの実施・説得には原子力・放射線部会、農業、森林、建設、生物工学部門などの技術士の連携が大いに貢献できるのではないのでしょうか。

桑江部会長が部会報 11 号に述べられた“個人から有志の会へ、有志の会から部会活動へ”の言葉も有ります。技術士会全体、そして多くの科学技術者がこのような意識を持つことができれば更に大きな力を発揮できるものと考えます。

【私の提案】

福島県浜通りの復興は除染と廃炉がテーマになっております。福島第一原子力発電所は 40 年の目標工程で廃炉へ向けての計画を実施推進している最中です。しかしデブリの状況等は分からないこともあり、どうなるかは推測しがたい現状であります。

大きな問題ですが、一つ提案があります。1F 廃炉後の活用として、世界遺産にできないだろうか、ということです。可能であったとしても長い期間の末となり、多くの関係者は見届けることはできないかも知れません。しかし、現在世界中には 500 基からの原発が存在し、いずれは次々と廃炉の運命にあります。この近い将来に降りかかる世界的な課題の解決に向けた「廃炉トレーニングセンター」として、世界中の廃炉に係る技術者の最先端の教育拠点にすることはできないだろうかと考えています。

以上



部会長挨拶

原子力・放射線部会
部会長
桑江 良明



原子力・放射線部会では昨年6月の第10回全体会議(総会)において、「過去10年間を振り返っての今後10年に活動方針」を制定・承認しました。直後の記念行事冒頭の挨拶で私は「この活動方針は、“作って終わり”ということではなく、これを素材として議論をしていきたい」と述べました。これは部会員に向けた言葉であるとともに、自分自身への戒めでもあります。

部会が出来て2年目の平成19年3月に、提言冊子:「期待に応える原子力・放射線部門の技術士」を発行しました。当時の幹事がメール上で議論を交わし、原子力・放射線分野での技術士制度の具体的活用策を提言として纏めたものです。取りまとめ役を任じられた私は、最終稿を部会HPに掲載し関係個所に送付して満足に浸っていた記憶があります。「後は誰かが何とかしてくれる」と。この提言冊子は、自分たち自身の言葉で原子力・放射線部門技術士の意義と活用策について述べたところに、当時としては一定の意味があったと言えます。しかし、それだけでは何も変わりませんでした。

「今後10年の活動方針」は、早速「平成26年度下期以降の活動計画」として具体化され部会HPを通じて部会員に周知されています。さらに、その活動計画も人員等が要因で実行が困難と判断されれば現実的な修正が加えられています。つま

り「絵に描いた餅」ではなく、実行・実現するための方針、計画なのです(当然のことと言えばそれまでですが)。これは、過去10年の反省から生まれたものです。

先日(4月17日)、部会主催の新技术士講習会(歓迎会)がありました。その冒頭挨拶で私は次のような趣旨のことを申し上げました。

「部会の過去10年の歴史は、上手くいったことはもちろん、上手くいかなかったことも含めて財産である。これから新たな気持ちで部会活動に加わる皆さんは、ぜひ、これまでの部会の経験を「踏み台」にして、より高みを目指して欲しい。」

10年の部会活動を通じてつくづく感じることは、ボランティア組織活動の維持向上がいかにか難しいかということです。報酬でもなく地位でもなく、一人一人の「貢献意欲」のみを結集させて何かを行う。確かに簡単なことではありません。しかし、絶えずモチベーションを持った新たな仲間が加わり、新陳代謝を活発に繰り返しながらやっていけば不可能ではないという希望も持てるようになりました。さあ、部会の新たな10年に向けて共に頑張りましょう!!



理事会での話題から

日本技術士会理事
倫理委員長
部会相談役
林 克己



2011年6月から2期4年間理事を務めました。6月で任期満了となりますので、「理事会での話題から」を書くのは最後になります。

今回は特に理事会に限らず、技術士制度に関して日頃感じていることを（いつも同じですが）書かせていただきます。

公共工事の入札等で技術士制度が活用されている建設部門等とまだ活用が進んでいない他の部門とでは所属組織における技術士の取扱いがかなり異なります。技術士はその8割以上が企業等に所属していますので、所属企業がメリットと感じなければそれなりの扱いになります。

技術士制度の本来の目的からすれば、国や地方自治体での技術士制度活用ももちろん広げるべきです。民間つまり学協会や業界団体、企業毎での活用も進めて公益確保をさらに確実にすることにも力を入れるべきです。たとえば米国機械学会（ASME）では設計図書へのサインなどにPE制度をうまく組み合わせて公益確保を図っています。また、企業ではデザインレビュー（DR）でのペリファイア資格として企業内で活用している例もあります。

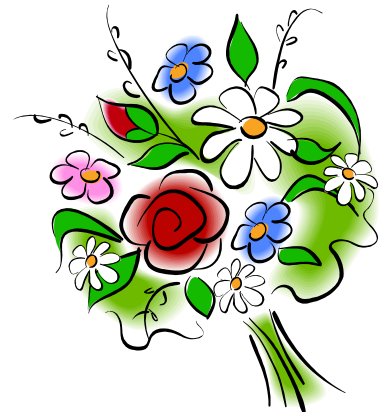
企業としての活用の方法としては、試験そのものもあります。第一次試験は大学専門課程卒業レベルなので採用に使えますし、原子力業界のような総合科学技術の場合は新入社員や中途採用者の

原子力教育の達成度測定やフォローアップにも有用です。第二次試験は技術レベルの確認ばかりでなく技術士登録後は公益確保・継続研鑽の縛りがあるため、管理職登用前に目指してもらうのが良いと思われます。

日本技術士会としては、多くの部門、多くの業界にたまねく活用が進むように活用促進委員会（次期体制では統合改組され社会委員会となる予定）がありますが、関連する業界に対して個別に進めるのはやはり部会が中心になります。

日本技術士会でやるべきこと、部会レベルでできること、部会員個人でできること、所属組織の技術士会でできること、業界の技術士会連絡会でできること、大学技術士会でできること、それぞれの特長を使って活用策を議論し提案し試用して広めていくことが大切です。そのキーワードは「公益確保」です。

最後になりましたが、まわりの同僚・後輩・知人など、受験者を直接増やす努力もよろしくお願いいたします。



今後10年の活動方針を踏まえた 活動計画

原子力・放射線部会
 部会長補佐
 佐々木 聡



昨年の6月に部会創立10年目を迎えるにあたり、これまでの活動を反省し、今後10年の活動の道標を定めるために、『原子力・放射線部会の過去10年を振り返っての今後10年の活動方針について』をとり纏め、第10回全体会議において承認頂きました。

その際の部会員の皆様との約束事として、本活動方針の反映は平成26年度下期からとし、その具体的な活動計画については、役員会に一任いただき、その検討結果を部会ホームページに掲載し、部会員の皆様に周知することとなり、役員会審議（9月19日）、役員への第一次意見募集（9月25日～10月6日）、役員への第二次意見募集（10月7日～10月4日）、役員会メール審議（審議期間10月14日～10月20日）を経て、10月20日に定め、部会ホームページにて掲載いたしました。

http://www.engineer.or.jp/c_dpt/nucrad/topics/003/003624.html

平成26年10月以降、従来の継続活動に加えて、4つの柱に従った以下の8つのプロジェクトを開始し致しました。

【第1の柱】3.11事故の反省・教訓を風化させない働きかけ、安全文化醸成に資する活動

- ①原子力・放射線部門の技術士として安全文化と技術者倫理を学び直す取り組み
- ②部会員の福島支援活動の経験から住民目線のリスクコミュニケーションを考える
- ③福島第一原子力発電所事故事象の理解から収束への道筋の調査（仮題）

【第2の柱】技術士の認知度向上と技術士数増に向けた活動

- ④各機関の受験者増の取組み事例の紹介
- ⑤原子力関連学部学科・大学院への技術士制度説明会の実施
- ⑥原子力学会の小中高教科書におけるエネルギー・放射線関連記載に関する調査協力の紹介

【第3の柱】部会員の技術士活動の支援

- ⑦原子力・放射線関連の時事問題の解説と説明のための指標等の作成

【第4の柱】広報活動

- ⑧地域本部のWEB中継を利用した関東地区と他地域の技術士との連携

なお、本活動計画を具体的に進めるためには、皆様からのご協力が不可欠です。今後も部会ホームページや一斉メール等を活用して、活動予定・状況等を適時お知らせしていきますので、部会一体の活動となるよう、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

「北関東地区見学と報告会」実施報告

高橋直樹・阿部定好

2015年1月10日に「原子力・放射線部会北関東地区見学と報告会」が日本技術士会茨城県支部、JAEA技術士会、神峰技術士会の共催、及び福島県支部、防災支援委員会、JANSI 技術士会の協力の下で、講師・スタッフを含め62名という多数の参加者を得て盛大に開催されました。今年、日本原子力研究開発機構原子力科学研究所内にあるJ-PARC（物質・生命科学実験施設、ニュートリノモニタ棟）の施設見学、各技術士会からの活動報告を行いました。

大山幸夫原子力科学研究所所長より同研究所の概況（主要施設及び主な研究活動等）、坂元眞一広報統括アドバイザーよりJ-PARCを構成する主要施設と研究成果等を紹介していただいた後、施設見学を行いました。J-PARCでは、加速した陽子をターゲットに当てることで発生する中性子、ニュートリノ等を利用して様々な研究開発が行われており、燃料電池、磁性素材（ハードディスク等）等の開発に活かされています。発生した中性子を試料に照射すれば、X線では確認できないような水素やリチウムといった軽元素について検出ができることから、その特性を利用して、タンパク質中の構造解析や結晶構造の解析、非破壊での元素分析等が可能であり、今後、新たな産業の創出が期待されている。陽子のターゲットには、中性子の発生特性、冷却しやすい等の利点があるため、液体水銀が用いられています。見学した物質・生命科学実験施設では、多くのユーザーを受け入れ、数日単位で各種研究が行われています。研究成果を公開する前提であれば、当該実験施設は無料で利用できます。

見学終了後は、原子力・放射線部会の創立後10年間の活動の総括と今後の活動方針（桑江部会長）、茨城県支部における各種講演会開催や青少年の科学技術に対する啓蒙活動への参画等の取組み状況（本田支部長）、JAEA技術士会（青木氏）、神峰技術士会（久恒氏）からそれぞれの取組み状況等について報告を受けました。

交流の場（懇親会）では、大場恭子原子力学会倫理委員会委員長をお招きして講演いただくと共に、各参加者の活動状況を紹介して頂きました。



原子力科学研究機構 JRR-1 講義室前にて撮影

<第2の柱> 部会の取組み

「第一次試験合格者歓迎の集い」 実施報告

亀山雅司

2015年1月16日の例会後、第一次試験合格者歓迎の集いを実施しました。原子力・放射線部会の活動内容のご紹介、第二次試験情報について、そして参加者の御三人からご質問をお受けしました。受験情報や技術士捕、技術士の意義などが話題に上がりました。当日に、特に私が感じたのは「文字情報の限界」と「会に参加すればこそその利点」でした。例えば、業務経歴については、現場の第一線や研究所に勤めていない、どちらかと言えば事務方に近い職務の方もおられます。受験資格の説明書等を読んで、自分は技術士受験の業務経歴は書けない、と思い込みをしている場合があります。集いに来て下されば状況が違ってき

ます。例えば、同じ出来事や風景を見ても、それらを普通の出来事や風景だと捉える人もいれば、そこに技術士の活動を見出せる人もいます。自分が見えないものに気付くことは大変難しいことですが、諸先輩には見えており、見方を一緒に考えて貰うこともできるのです。お仕事が忙しく、貴重なお時間を使って会にでかける意義を感じにくい場合もあります。でも…、行ってみればこそ「こんな情報もあり?!」という利点に出会えるのです。

歓迎会には、皆さんを応援したい、皆さんと一緒に技術士の道を歩んで行きたいと願っている先輩技術士が多数出席しています。これをお読みの受験生の皆さん、来年度の歓迎会でお会いし、一緒のお時間を過ごせますこと、一同楽しみにしています。

<第4の柱> 部会の取組み

「WEB会議システム」を利用した取組み紹介

大橋正雄・伊藤友加里・山田裕之

広報班では、「原子力・放射線部会の過去10年を振り返っての今後10年の活動方針について」に沿い、平成26年度下期よりWEB会議システムを利用した各地域本部への講演展開の試みを開始しました。まずは、テスト段階としてこれまでに2回、近畿本部と接続し、統括本部で実施した「技術士の夕べ」を中継した結果を以下に報告します。

➤ 第1回目「第42回技術士の夕べ」

日時：平成26年11月28日(金) 17時30分～20時00分

場所：日本技術士会荻手第二ビル5階AB会議室（統括本部）、日本技術士会近畿本部会議室（近畿本部）

講演：「目から鱗の福島発電所事故の真実」

講師：石川 迪夫氏

（原子力デコミッションング研究会 会長）

参加者数：統括本部79名、近畿本部10名（うち原子力・放射線部門4名）

アンケート概要（近畿本部）：WEB会議という形態での参加でも支障は無く、今後もこの形態で参加したい。大阪だけでなく神戸地域での実施も検討して欲しい。

反省事項：ストリームオーサーとの連携がうまくいかなかった。WEB会議システムの準備時間の確保が必要。



WEB中継システムを利用して講演を聞く
近畿本部からの参加者（第42回技術士の夕べ）

➤ 第2回目「第44回技術士の夕べ」

『意見交換会：部会員の福島支援活動の経験から、住民目線のリスクコミュニケーションを考える』
講演（第一部）：「放射線をいかに語るか 福島事故の経験から」

講師：伴 信彦 氏（東京医療保健大学 東が丘・立川看護学部 教授）

部会員の福島支援活動から報告：

- ・中田よしみ（原子力・放射線部会 会員）

- ・高橋 一智（原子力・放射線部会 会員）

第二部（意見交換）

日時：平成27年3月6日(金) 18時～20時

場所：日本技術士会荻手第二ビル5階AB会議室（統括本部）、日本技術士会近畿本部会議室（近畿本部）

参加者数：統括本部45名、近畿本部12名（うち原子力・放射線部門3名）

ご意見（近畿本部）：意見交換会で配布された質問

が難しく意見が少なかった。答え易いように質問の仕方を変えた方が活発な意見が出る。システム運用習熟後は3元中継等も試み、参加者から参加費の徴収も検討すべき。他部門参加者も考慮した内容にして参加者の安定確保を図るべき。

反省事項：WEB中継ならではの内容充実を図るべき。

なお、平成27年度は7月、11月、1月、3月にWEB会議システムによる近畿本部への中継を予定しています。今後も近畿本部、統括本部の皆様からのご意見を反映させながら展開する予定です。

<第2の柱> 取組み事例 (1)

「第5回技術士制度・試験講習会」 参加報告

丸下元治

今年も技術士資格取得を目指す受験生を対象とした「第5回技術士制度・試験講習会」(主催：日本原子力学会、共催：東京工業大学・日本保健物理学会)への協力依頼があり、技術士(原子力・放射線)有志14名が対応しました。また、出席した19名の受講生は最後まで熱心に受講しました。以下に講習会概要を報告します。

[日時] 2015年2月11日(土) 13時30分～17時30分

[場所] 東海大学 高輪キャンパス 4号館4102教室

[技術士14名(以下敬称略)] 内田剛志、井上明、河野繁宏、神谷栄世、萩原利宣、乗物丈巳、亀山雅司、勝田昌治、大門清、根岸孝行、佐々木聡、川上尚志、伊藤友加里、丸下元治

1. 講習会開催にあたって

- ① 学生への技術士資格取得に向けたメッセージ：伊藤敦 教授(東海大学工学部 原子力工学科主任)
- ② 技術士資格取得の勧め、原子力学会における技術士制度への期待：浜崎学(日本原子力学会教育

委員会 技術者教育小委員会委員長)

③ 技術士資格取得の勧め、保健物理学会における技術士制度への期待：近江正(日本保健物理学会 専門資格委員会 技術士WGリーダー)

2. 技術士制度・試験の紹介(丸下元治)

3. 技術士試験への心構え・体験談

① 試験受験申込書、業務経歴書[証明書]への心構え・体験談(井上明)

② 択一試験への心構え・体験談(河野繁宏)

③ 記述試験の心構え・体験談(神谷栄世)

④ 口頭試験の心構え・体験談(萩原利宣)

4. 試験の傾向と対策(内田剛志)

5. 全体質問・個別質問の趣旨説明(佐々木聡)

6. 全体質問(コーディネーター：内田剛志、パネラー：井上明、河野繁宏、神谷栄世、萩原利宣、丸下元治)

7. 閉会挨拶(丸下元治)

8. 個別質問、相談コーナー



① 概要質問ブース(内田剛志、乗物丈巳)

② 選択科目別ブース：


- a. 一次試験向け(亀山雅司、勝田昌治)
- b. 設計・建設(河野繁宏、大門清)
- c. 運転・保守(萩原利宣、根岸孝行)
- d. 核燃料サイクル(井上明、佐々木聡)
- e. 放射線利用(川上尚志、丸下元治)
- f. 放射線防護(神谷栄世、伊藤友加里)



第5回 技術士制度・試験講習会の様子

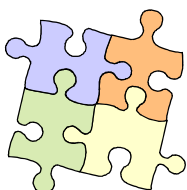

 講師から寄せられた感想・メッセージ
 
「第 5 回技術士制度・試験講習会の感想」

井上 明（講師）




今回、講師のお話を頂き、はたして務まるものかと一抹の不安を感じましたが、技術士を目指す方々に少しでもお役に立てればとお引き受けしました。私は「試験受験申込書、業務経歴書〔証明書〕への心構え・体験談」について自身の体験を踏まえ、説明しました。私が受験した平成 25 年度から一部制度が変わり、特に二次試験においては、技術体験論文がなくなった事に伴い、試験受験申込書に記載する業務内容の詳細が重要である事を強調したつもりでしたが、うまく伝わったか気になりました。後半は個別質問・相談コーナーで、核燃料サイクルを担当しました。受講者はお一人だけで寂しかったですが、その分、十分に質疑応答ができたと思います。既に機械部門での資格をお持ちで、今回原子力・放射線部門を受験するとの事、原子力の基礎知識に関し、勉強方法をアドバイスできたと思います。技術士を目指す方々のために、微力ながらお役に立てたのなら光栄です。又、今回貴重な体験の場を設けて頂いた事に感謝します。

(以上)


「技術士制度・試験講習会」に参加して

神谷 栄世（講師）



以前のこの講習会に受講者として参加し、その後技術士試験に合格でできた者として、同じ講習会で体験談を披露できたことは幸いなことでした。体験談の内容は受講者の参考になったのだろうかと思うとともに、参加者の質問にうまく答えられなかったことについては、自分なりの回答を整理しておく必要があると考え感想をまとめました。質問は、「業務独占資格と比較して、名称独占資格の技術士を苦勞して取る意味は？」でした。タイミング良く、原子力学会誌の 2015 年 3 月号の記事が参考になり、次のようにまとめました。『技術士は、社会が求める「知の統合」を実現できる新しい技術者像の道しるべとなる資格』。今、福島復興や環境問題などに知の統合が求められています。技術士には自らの持つ技術力を社会のために役立てようとする技術者が求められ、そのような技術者がたくさん生まれることによって知の統合が進み社会問題が解決に向かっていくのではないのでしょうか。もちろん、他の資格であっても、また、資格がなくても、その思いを持つことが重要ですが、技術士はその思いと問題解決の間の道しるべの役に立つものと考えました。ただ、技術士はその役割を自主的に創造していく必要があるため、他の資格と比べ判り難い資格です。その役割は未来に向かって期待されるもので、創造は簡単ではありません。しかし、技術士が集まることにより解決していくものと考えますし、講習会等の会の活動はその意味でも重要なことであると感じました。

(以上)

「講習会に初めて参加して」

河野 繁宏 (講師)



自分のプレゼンが受講者のご期待に添える様なものだったかは甚だ怪しい所ですが、他の技術士の方のプレゼンは、自分が受験する前に聞いていればもっと効率的な勉強が出来ただろうと思われました。特に講習会後に行われた個別質問・相談コーナーで同じ選択科目を担当した方の勉強方法は非常に素晴らしく、今度別の部門を受検する機会があるなら自分もその方法を真似したいと思いました。さて、この講習会に参加して面白いと感じたことがあります。それは、講師がパネラーとなって行われた全体質問に於いて、技術士を取得する価値について受講者から質問があった際に、講師・事務局の方の発言が多かった点です。自己研鑽のためと言うのは当たり障りがない話ですが、それだけでは国家資格として存在する意義が薄く感じられ、やはり技術士の資格の社会的な価値を高めたいと考えておられる方が多いからだと感じました。この様な講習会で受講者からダイレクトに質問を受けたのを機会に、日頃考えておられることを皆さんが声に出されたのだと思います。本講習会の目的は技術士の認知度を上げ、少しでも多くの方に技術士の資格を取得して頂くためですが、そのためには技術士の社会的な存在価値の向上が不可欠であり、価値のある資格であれば取得者も自ずと増えるはずだと思います。

(以上)

「技術士制度・試験講習会」に参加して

萩原 利宣 (講師)



技術士制度試験講習会の講師のお誘いを受け、試験制度変更後の受験経験がご要望にお答え

できる部分もあるかとも思ってお受けしました。私の担当は口頭試験への心構え・体験談で、受験準備に必要なキーメッセージとして「技術者として業務等にあたる自分自身の姿勢や考え方を技術士に求められる資質と照らし合わせて整理すること」をお伝えしました。本講習会資料はインターネット上で公開されますが、実は私が受験する際には過去の本講習会資料を大いに参考にさせて頂きました。今回の資料内容が受験を志す方々に少しでもお役に立てたら嬉しく思います。講師発表後の全体質疑の中では、技術士の資格取得メリットを問う質問がありました。これから受験するにあたって、当然知りたいことであり、そういった質問を直接できる本講習会は受験者にとって大変貴重な機会であると感じました。また質問への回答にもありましたが、技術士資格取得のメリットをより高めるためには、一定数以上の技術士の存在が重要であり、そのためにも本講習会の意義は大きいと感じました。本講習会を通して、受講者の方と後日メールでご連絡をとるなどさらなる活動機会を得ることができ、福島復興や原子力安全へ貢献したいとの思いに加え、新たな思いを得た貴重な機会でした。

(以上)

＜第2の柱＞ 取組み事例（2）

「日本原子力学会 教育委員会 教科書調査WG」参加報告

芳中一行

標記のWGに参加し、学校教育で使用予定の教科書について、専門家としてレビューする機会を頂きました。以前より、原子力や放射線に関する正しい知識を教育することの重要性を感じており、参加者募集があった際に、直ぐに申し込むことにしました。レビューの対象とされたのは、教科書検定を通過した高等学校社会科の教科書で、特に福島第一原子力発電所事故に関連する部分が抽出されたものが用意されていました。

WGでは、様々な視点から、コメントすべき内容について意見が出され、議論となりました。教科書の記載は、事実を教育しようとするものばかりではなく、ディベートを前提としたもの、個人の主義主張、聴衆意見の例示、マスコミの記事をベースとしたもの等様々であり、コメントの仕方に難しさを感じましたが、専門家として適切な提言をしなくてはならないとの思いで、積極的に議論に参加しました。議論の結果は、事故の事実関係、被ばくの影響、原子力利用の状況、エネルギー問題等に関する記載への提言に重点を置いた形でまとめられ、春の原子力学会で報告書として配布されています。被災者の気持ち、風評被害、原子力村扱いなど、これまで以上に考えさせられ、いい経験をしたと思います。



＜第2の柱＞ 取組み事例（3）

各機関の技術士受験者増の取組み 【第一弾】神峰（かみね）技術士会

西村丹子

各機関で実施されている技術士受験者数および技術士数増の取組みを数回にわけて紹介していきます。第一弾の今回は、日立グループ社内技術士会の1つである「神峰（かみね）技術士会」における取組みをご紹介します。

【第一弾】「神峰技術士会」の取組み

「神峰技術士会」（前身は「日立原子力技術士会」）は日立グループ社内技術士会の1つであり、構成員の大部分は日立GEニュークリア・エナジー（株）に所属している技術士（原子力・放射線、機械、電気電子、応用理学、他）です。神峰技術士会と日立GEニュークリア・エナジーでは、技術士取得奨励活動を通じて、技術士受験者・取得者増に取り組んでいます。以下に取組みの一例をご紹介します。

- ・新入社員向け技術士ガイダンスの実施
新入社員を対象とした「技術士資格」を紹介するガイダンスを実施。新入社員は「技術士第一次試験」を全員受験。
- ・技術士第二次試験ガイダンスの実施
第二次試験ガイダンスを実施（技術士試験要領の説明、合格体験談紹介など）
- ・試験対策勉強会の立ち上げ
第二次試験受験対策の勉強会を立ち上げて定期的に勉強会を実施。
- ・口頭試験ガイダンス・模擬面接
第二次試験筆記試験合格者を対象に、口頭試験ガイダンスおよび模擬面接を実施。
- ・その他
技術士取得者全員を建物入口のパネルにて紹介し技術士取得を奨励。また、作業着の左胸に「技術士ワッペン」を付けて模範行動とともに資格取得支援を明示。

2014年度下期 活動実績

(1) 2014年度(平成26年度)役員会

- ・第5回役員会(2014年11月28日)
- ・第6回役員会(2015年1月16日)
- ・第7回役員会(2015年3月6日)

(2) 継続技術研鑽

① 技術士の夕べ

- ・第42回技術士の夕べ

日時:平成26年11月28日(金)

講演:「目から鱗の福島発電所事故の真実」

講師:石川迪夫氏(原子力デコミッションング研究会 会長)

- ・第43回技術士の夕べ

日時:平成27年1月16日(金)

場所:日本技術士会葺手第二ビル5階会議室

講演:「原子力産業界における安全文化醸成(活動)の状況」

講師:浜田潤氏

- ・第44回技術士の夕べ

日時:平成27年3月6日(金)

(1) 講演会

講演:「放射線をいかに語るか福島事故の経緯から」

講師:伴信彦氏(東京医療保健大学東が丘・立川看護学部教授)

場所:日本技術士会葺手第二ビル5階会議室

(2) 部会員からの取組み報告

報告1『『困っていること』を聴くことから』(部会員 中田よしみ氏)

報告2「除染情報プラザ派遣講師としてしたこと・感じたこと」(部会員 高橋一智氏)

② 見学会

- ・北関東地区 見学と報告会

日時:2015年1月10日(土)

場所:日本原子力研究開発機構 原子力科学研究所J-PARC

(3) 合格者歓迎会

- ・第一次試験合格者歓迎の集い

日時:2015年1月16日(金)

(4) 部会員の投稿

- ・「原子力発電所の再稼働に向けた対策と技術士のモチベーション」、月刊技術士2015年2月号、亀山雅司

- ・「東京電力福島第一原子力発電所事故を受け、技術士がなすべきこと」、月刊技術士2015年3月号、佐々木聡

- ・「今後の原子力利用の進め方と技術士の役割」、月刊技術士2015年3月号、岡村章

- ・「日本技術士会 原子力・放射線部会の活動」、日本原子力学会誌(アトモス)2015年3月号、桑江良明

2015年度上期活動予定

- ・4月17日 新技術士講習会

- ・5月15日 もんじゅ見学会

- ・6月19日 第11回全体会議、特別講演会

- ・7月17日 技術士の夕べ(第45回例会)

<編集後記>

会報16号は、日本技術士会福島県支部長の長尾様より巻頭言を頂きました。「(混乱をきたさないようにと安全であると配信されがちであるけれど)自分たちで調査し解決に向け努力できる」とのメッセージからは、各人が自ら考え取り組むことで活路を見出し得るという力強さを感じました。

会報や部会HPからの配信を通じて、原子力・放射線部門の技術士のみならず、他の分野の技術士(技術者)、研究者との交流のきっかけとなれば幸いです。(西村)